

241 卵巣子宮内膜症におけるエストロゲンレセプターの免疫組織化学的検索

山梨医大 社会保険山梨病院*
池上淳, 吉田孝二*, 加藤順三

〔目的〕子宮内膜症のエストロゲンレセプター (ER) の組織局在性に関する報告は少ない。従って今回我々は、卵巣子宮内膜症におけるERの免疫組織化学的検索を行い正所性子宮内膜のそれと比較した。〔方法〕卵巣子宮内膜症と病理診断され、かつホルモン投与をうけていない症例15例を対象とした。ERに対するモノクローナル抗体を用いてPAP法で染色した。染色強度を0 (none), 1 (weak), 2 (distinct), 3 (strong), に分け次の式にてスコア化した。 $\sum Pi (1+i), i=1,2,3$ $Pi = (\text{染色された細胞数} / \text{標的細胞数}) \times 100$ 。さらに同一患者の正所性子宮内膜と比較した。また各症例は、H-E標本で内膜日付診を行い性周期を確認した。〔成績〕陽性細胞はすべて核内が染色された。正所性子宮内膜では腺管上皮細胞核と間質細胞核が染色された。卵巣子宮内膜症においても同様であった。正所性子宮内膜の腺管上皮細胞核のスコアは 246 ± 96 (M $\pm$ SD, N = 15)、卵巣子宮内膜症の腺管上皮細胞のスコアは 39 ± 41 (M $\pm$ SD, N = 15) で卵巣子宮内膜症の方が有意に低下していた。さらに正所性子宮内膜と違い卵巣子宮内膜症のER陽性率は周期的変化をしめさない傾向が認められた。〔結論〕卵巣子宮内膜症におけるERの免疫組織化学的検索を検討した結果、腺管上皮細胞核と間質細胞核にERは局在していた。さらに正所性子宮内膜と比較して、ER陽性率は低下しており、ホルモン感受性に乏しいことが示唆された。

242 ヒト子宮筋腫におけるERmRNAの検出

山梨医科大学
平田修司、平井光男、萩原和紀、長田孝明、加藤順三

〔目的〕子宮筋腫はエストロゲン依存性に発育するため、子宮筋腫のエストロゲン受容体 (ER) 蛋白については諸家により検討、報告されているが、ER蛋白の合成調節に関与するmRNAについての報告は現在のところみられない。本研究は、ヒト子宮筋腫のERmRNAを、ラット子宮より合成されたcDNAを用いて検出することを目的としたものである。〔方法〕担子宮筋腫患者の手術検体より子宮筋腫および正常筋層を摘出し、ただちに凍結した。検体組織を4Mグアニジン溶液中にてホモジェナイズ後、CsCl法によりtotal RNAを抽出し、さらにオリゴ (dT) セルロースカラムを用いてpoly (A) RNAを精製した。RNAを電気泳動後、ナイロンメンブランにトランスファーし、 ^{32}P にてラベルしたラットERcDNAにてハイブリダイゼーション後、オートラジオグラフィにてシグナルを検討した。〔成績〕①ラットERcDNAを用いて、ヒト子宮筋腫、正常筋層のERmRNA bandを検出し得た。②ヒト子宮筋腫および正常筋層のERmRNAはともに約6.6kbの分子サイズであり、この分子サイズはラットのそれとほぼ同等のものであった。③単位RNAあたりのERmRNAレベルは、子宮筋腫>正常筋層である傾向がみられた。〔結論〕①ラットERcDNAを用いてヒト子宮筋腫のERmRNAを検出し得ることが明らかとなった。②ヒト子宮筋腫のERは、少なくともmRNAレベルでは正常筋層と相同である可能性が高いことが示唆された。③ヒト子宮筋腫のERの合成調節に、mRNAの転写速度あるいは代謝速度が関与していることが示された。